

郷土の本

江戸文化再考

中野三敏著

江戸文化再考

近世文学研究の第一人者で九州大名誉教授の筆者が、国文学研究資料館で行った講演をまとめた一冊。「近代主義的な評価に片寄り過ぎた戦後の江戸理解」に対する異議申し立てであり、可能な限り「立ち位置を江戸に即した場所に置いて」江戸文化を再考する試みとなっている。

全体は5部構成。第1章では、明治以降、江戸の見方に大きく5回の変化があったとして、近代人の江戸理解の変遷を概説。続く第2章では、江戸文化の基底をなす「雅」と「俗」を、ハイカルチャーとサブカルチャーとして捉え直す。300年間の江戸時代を通し、文化に占める「俗」の領域が拡大していくが、筆者は一貫して「価値の上では『雅』の方が上位だった」と指摘、ハイカルチャーとサブカルチャーの価値関係が逆転したともされる現代の文化状況を照射する視点を提供する。サブタイトルに掲げた「これからの近代を創るために」というメッセージが随所に込められている。

第5章はいわば“和本入門”。

江戸文化の理解が困難になった原因として、「変体仮名や草書体の漢字」に対する理解能力の喪失を

挙げる筆者ならではの講演だろう。
(笠間書院・1785円)